

『恍惚の人』

有吉 佐和子 著 | 新潮社 1972年

石田 仁志 (いしだ・ひとし)

東洋大学文学部日本文学文化学科教授。1988年東京都立大学大学院人文科学研究科国文学専攻修士課程修了、91年同博士課程中退。研究・専門分野は、日本近現代文学の研究で、特に大正・昭和期文学文化（横光利一を中心に）と現代女性文学（家族小説）。主な著作は、「横光利一『純粋小説論』への課程」（国語と国文学）、「横光文学における異性愛表象」（国文学・解釈と鑑賞）、『横光利一の文学世界』（共編著、翰林書房）など。

家族のつながりというものは、家族が何か問題を抱え込まなければならなくなったとき、初めて意識されるものだろう。そして家族の力というものも、危機と背中合わせにしか発揮されない。厄介きわまりないが、そんなことを私に教えてくれたのがこの小説である。

この小説は、日本が高度経済成長を成し遂げ、ひとつの曲がり角を迎えようとしていた時代に、ある核家族が老親を介護し看取っていく物語である。アルツハイマーや認知症といった言葉が知られていなかった時代、痴呆を発症した高齢者どどのように接すればよいのか、日本人には分からなかった。「恍惚の人」とはそんな老人を指した表現として、ペースとユーモアを感じさせる絶妙のネーミングで当時の流行語ともなった。

小説の冒頭で、老母の急死をきっかけに老父茂造の痴呆症状に家族は気づかされる。降って湧いた介護の問題であるが、そこから茂造の痴呆症状は悪化の一途をたどる。公的な介護サービスが今のようにはなく、息子の信利はサラリーマンであるために介護はできず、結局妻の昭子が仕事をやめて舅の面倒を自宅で見ることになる。昭子は徘徊する茂造を探し回り、深夜の排泄を介助し、食事を用意する。その奮闘振り是在宅での老人介護が核家族にとって如何に重い負担であるかを訴え、まるで読者に対して自分の家族の力を問いただそうとしているかのようにも感じる。まさに介護老人を抱えること不安と現実がここにある。

しかし、物語の後半、人間的な感情を失っていると思っていた茂造が雨に濡れる泰山木の白い花に見とれている姿を目にして、昭子は彼の中に美を感じ取る感性が失われてはいないことを知る。そして、次第に赤ん坊ようになっていく彼の笑顔の中に人としての生命力を見たことで、彼を〈生かし切る〉ことこそが家族としての自分たちの責任だと気づかされる。家族の中で老いていくことは、壊れていくことでも失われていくことでもなく、生命の源へ回帰していくことである。そして介護を通じて、老いと死を受け止め、家族は強くなっていく。ラストで孫の敏が「もうちょっと生かしていてもよかったね」と呟く言葉にドキッとさせられるが、そこにこそ家族としての飾らない愛情があるように私には思える。40代の夫婦に是非とも読んでもらいたい私の一冊である。また、映画「恍惚の人」に出演した森繁久彌さんの迫真の演技もあわせてご覧になることをお勧めしたい。



Books : editor's choice

- 『孤立化する家族—アメリカン・ファミリーの過去・未来』越智道雄 時事通信社 (1998年)
- 『近代家族の曲がり角』落合恵美子 角川書店 (2000年)
- 『バリの女は産んでいる—恋愛大国フランスに子供が増えた理由』中島さおり ポプラ社 (2005年)
- 『平らな国デンマーク—「幸福度」世界一の社会から』高田ケラー有子 日本放送出版協会 (2005年)
- 『団塊と団塊ジュニアの家族学—平成拡大家族』袖川芳之、花島ゆかり、森住昌弘 電通 (2005年)
- 『超少子化時代の家族意識』毎日新聞社人口問題調査会編 毎日新聞社 (2005年)
- 『少子高齢社会のみえない格差—ジェンダー・世代・階層のゆくえ』白波瀬 佐和子 東京大学出版会 (2005年)
- 『迷走する家族—戦後家族モデルの形成と解体』山田昌弘 有斐閣 (2005年)
- 『家族と法—個人化と多様化の中で』二宮周平 岩波書店 (2007年)
- 『出生率の回復とワークライフバランス—少子化社会の子育て支援策』丸尾直美他 中央法規出版 (2007年)
- 『アジアの家族とジェンダー』落合恵美子、山根真理、宮坂靖子 勁草書房 (2007年)
- 『家族の昭和』関川夏央 新潮社 (2008年)
- 『地域の子育て環境づくり』大日向雅美他 ぎょうせい (2008年)
- 『現代社会とメディア・家族・世代』児島和人他 新曜社 (2008年)
- 『新版 データで読む家族問題』湯沢雅彦、宮本みち子 日本放送出版協会 (2008年)
- 『家族生活研究』宮本みち子、清水新二 放送大学教育振興会 (2009年)
- 『女性学/男性学』千田有紀 岩波書店 (2009年)
- 『よくわかる現代家族』神原文子・杉井潤子・竹田美知編著 ミネルヴァ書房 (2009年)
- 『近代家族とジェンダー』井上俊、伊藤公雄他 世界思想社 (2010年)
- 『「ひとりの老後」はこわくない』松原惇子 PHP研究所 (2010年)
- 『揺らぐ子育て基盤—少子化社会の現状と困難』松田茂樹他 勁草書房 (2010年)
- 『Phronesis フロネシス03「2030年の『住まう』を考える』三菱総合研究所編著 丸善プラネット (2010年)